

## 令和7年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要

## 目的・目標

- カリキュラム・マネージャーを中心とし、行事交流、日常的な交流にとどまらない、交流活動及び共同学習を実施する。
- 大学教授や教育委員会の指導主事も加わり、共同学習の在り方を見直すことで教職員の専門性の向上を図る。
- 学校施設の共用を活かし、すべての児童生徒が共に学ぶインクルーシブな学校運営モデルを確立・発信し、専門性の向上と共生社会の実現を目指す。

学校運営  
連携校

秦野市立末広小学校  
神奈川県立秦野支援学校(対象:知的障害)



併設型

カリキュラム・マ  
ネージャー

現末広小学校 総括教諭 特別支援学級主任

事業1年次の  
取組概要、  
成果・課題

## 取組概要

学校施設の共用環境を生かし、特別支援学校と小学校が連携した学校運営のもと、交流及び共同学習の充実と、専門性を生かした指導体制の構築に取り組んだ。教員の協働による授業改善や研修を通して、柔軟で新たな学びの在り方の実現を図った。

## 成果・課題

成果としては、交流及び共同学習の充実により、児童の相互理解や社会性の育成が促進された。また、教員間の連携強化と専門性の共有が進み、インクルーシブな授業実践の質的向上が見られた。

課題としては、持続的・発展的な取組とするための校内体制の整備や時間の確保、専門性の更なる向上が課題である。あわせて、学校全体での実践の定着に向けた仕組みづくりが求められる。

## 取組概要(事業2年次)

## 1 取組の全体像

学校運営連携校である小学校と特別支援学校が連携し、交流及び共同学習を教育課程に位置付けた授業改善と指導体制の構築に取り組んだ。これまでの交流の蓄積を基盤に、「何を」「どのように学ぶのか」を意識した授業づくりを推進した。

## 2 体育科における単元を通じた実践(重点)

単発的であった実践を見直し、単元を通じた指導計画に基づく継続的な授業を実施した。サーキット活動を取り入れ、児童同士が関わる場面を設定することで、関係性の深化と学びの連続性を図った。個別・グループ別指導やティーム・ティーチングにより、一人一人の実態に応じた支援の充実を図った。

## 3 授業改善の推進

単元計画の段階から両校の教員が協働し、授業後には学習状況や関わりを記録・共有した。これを基に指導改善を図るサイクルを確立し、実践の蓄積と授業の質の向上につなげた。

## 4 環境整備と日常的な交流

共有スペースの確保や施設の共同利用に加え、廊下等に作品や顔写真、名前を掲示した。これにより、日常的に互いを意識できる環境が生まれ、自然な関わりや相互理解の促進につながった。また、支援学校の児童が小学校施設を日常的に利用するようになり、交流が学校生活全体に広がった。

## 5 専門性の向上と単元パッケージ作成に向けた研究推進

大学教授等から継続的に指導・助言を受け、授業参観や研修を通して教員の専門性の向上と組織的な指導力の強化を目指すとともに、今年度の成果を踏まえ国語や算数での展開及び単元パッケージ作成に向けデジタルツールも含め教材研究を進めた。

①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

○今年度実施した交流及び共同学習

学年	主な教科	主な内容	キーワード
1年	生活・体育	学校探検、体づくり運動	知る・慣れる
2年	生活・体育	動くおもちゃ、うごきつくりあそび	
3年	社会・理科	地域学習、自然観察	触れ合う
4年	総合・図工	福祉学習、版画	
5年	体育・理科	テニピン、稲作	思いやる・関わる
6年	体育・図工	跳び箱、墨の絵	
支援級	生活・体育	野菜栽培、運動活動	仲良く
全体	行事・日常	給食交流、委員会活動	日常的な関わり



○2年「うごきつくりあそび」

時間	1	2	3	4(本時)
準備	友だちと一緒に活動する雰囲気に慣れ、体を動かす楽しさを感じる。	サーキット運動を通して、いろいろな動きに親しむ。	自分の体力に合わせて、動き続けることを楽しむ。	友だちと関わりながら、運動やゲームを楽しむ。
展開	1 集合、挨拶 2 目標をたてる 3 場の準備をする 4 心と体をほぐす			
	リズム遊び 準備体操でリズム遊びをする みんなで作るリズムに乗って踊る。(エビカーダンス、らーめん体操)			
簡単な動き (歩く・止まる・手をたたく)	サーキット運動 -走る・跳ぶ・くぐる・転がすなどの複数のコース -場を移動しながら、友だちと関わりながら体を動かす。 -音楽が流れている間はサーキット運動を継続するようにする。 -休場ポイントもあり、友だちを応援する場面もあり			
	風船などを使った自由遊び(転る・転がす)			
	振り返り一瞥づけ			
知		②観察カード	①観察カード	
男				④観察カード
女	④観察カード	②観察カード	③観察カード	
文	2年2組 支援学校	2年2組 支援学校	2年2組 支援学校	2年2組 支援学校



本事業では、交流及び共同学習を教育課程に位置付け、「何を」「どのように学ぶのか」を意識した授業づくりを推進した。全学年で計画的に実施するとともに、児童同士の関わりを通して学びを深めることを重視した。特に体育科では、単元を通した継続的な実践を行い、サーキット運動やリズム運動等を通して関わり合う場面を設定し、関係性の深化と学びの連続性を図った。授業は両校教員の協働により構想し、チーム・ティーチングや個別・グループ別指導、視覚的支援等により、すべての児童が参加できるよう工夫した。さらに、授業後の記録・共有を通して改善を図り、柔軟な授業の在り方の具体化につなげた。

②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

1 一体的な指導体制の構築

学校運営連携校間において、単元計画の段階から両校の教員が協働して授業を構想する体制を整えてきた。両校で連携を図り、一体的な指導体制を推進した。

2 柔軟なチーム・ティーチングによる専門性の発揮

小学校教員と特別支援学校教員による柔軟なチーム・ティーチングを行い、役割分担を明確にした指導を行った。授業進行と個別支援を組み合わせるとともに、指導内容に応じて柔軟に役割を調整し、専門性を生かした授業を実施した。

3 人材配置と支援体制

支援教育補助員の配置や校内支援体制の工夫により、授業準備や記録の充実を図り教員が専門性を発揮しやすい環境を整えた。

4 外部有識者の活用

大学教授等から継続的に指導・助言を受け、授業研究や研修を通して専門的知見を授業改善に生かした。



職員研修



共有スペース廊下掲示

指導案集

秦野市立東成小学校  
神奈川県立秦野支援学校

令和6年度 インクルーシブな学校運営モデル事業について

令和6年度、秦野市立東成小学校と神奈川県立秦野支援学校は、インクルーシブな学校運営モデル事業として、連携して授業を構想し、実践を行いました。この実践を通じて、両校の教員は、柔軟な指導体制を構築し、専門性を発揮する体制を整え、児童の学びを深めることに成功しました。

共有スペース廊下掲示

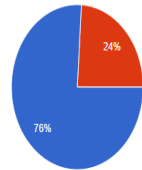
共有スペース廊下に掲示した実践記録や研修成果は、両校の教員にとって、学びの場となり、授業改善に生かされています。

本事業の成果（事業2年次）

1 児童の変容（アンケート結果を含む）

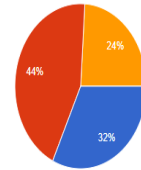
交流及び共同学習を教育課程に位置付け、特に体育科において単元を通じた実践を行ったことで、児童同士の関わりが継続的に生まれ、相互理解や協働的に学ぶ姿が見られるようになった。2年生の体育授業後のアンケートでは、【76 %】の児童が、「とても楽しかった」との回答となった。

学習（かくしゅう）は楽（たの）しかったですか？  
25件の回答



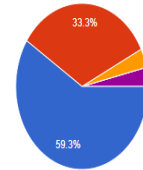
- とても楽しかった
- 楽しかった
- どちらともいえない
- あまり楽しくなかった
- 楽しくなかった

活動（かつどう）はうまくとりくめましたか？  
25件の回答



- とてもうまくいった
- うまくいった
- ふつう
- あまりうまくできなかつた
- できなかつた

友だちといっしょにできましたか？  
27件の回答



- とてもできた
- できた
- どちらともいえない
- あまりできなかった
- まったくできなかった

2 学びの質の向上

単元を通じた交流により、児童同士が互いに関わりながら学ぶ場面が増え、学びの連続性が生まれた。特に体育では、繰り返し関わることで安心して活動に参加する姿や、互いに動きを認め合う姿が見られ、主体的・協働的な学びの充実につながった。

3 教員の指導力・専門性の向上

両校教員による協働的な授業づくりやチーム・ティーチング、外部有識者からの助言を通して、個に応じた支援や指導方法の工夫が具体化された。これにより、交流及び共同学習を前提とした授業設計や実践力の向上が図られた。

4 体制・環境の整備による日常化の進展

共有スペースの活用や掲示等の環境整備により、児童が日常的に互いの存在を意識できるようになり、授業以外の場面でも自然な関わりが見られるようになった。これにより、交流及び共同学習が「特別な機会」から「日常的な学び」へと広がった。

**前年度からの変化・改善点**  
 児童の変化 : コミュニケーションをとろうと指文字や手話の習得、名前を覚えて呼び合う活動参加など具体的な成長が見られた。  
 教員の意識変化: 「分業して授業を進められる」という協働意識の向上、チームティーチングの実現

課題  
・  
今後の展望

1 課題【学びの質の向上と参加の在り方・指導体制と実践の充実】

支援級担当教諭とホームクラス担当教諭及び支援学校教諭との連携は進展し、交流及び共同学習における関わりや意欲の面で成果が見られた一方で、教科の目標や評価との関連付けや、発達段階・個に応じた参加の在り方、そして県立学校の専門性を生かした協働体制構築には改善の余地が残っており、本事業がねらいとする再現可能な単元パッケージ策定に向けて大学等の有識者や地域の福祉に係る専門家との連携強化が必要と判断している。

2 今後の展望

2年目の実績と反省を生かし、これまで体育科で培ってきた実践を基盤として、中央教育審議会専門委員で慶応大学名誉教授今井むつみ氏の支援を受けながら、国語科や算数科へと展開し、真の協働的な学びの実現を目指すとともに、「単元パッケージ」として整理し、再現可能な指導モデルとして市内外に発信する。